

おでかけウォッチャーでみる ツール・ド・九州2025の人流分析

石原 彰人

1 はじめに

「ツール・ド・九州」は、九州の経済団体トップと各県知事で構成される九州地域戦略会議にて開催が決定された自転車競技の国際大会である。国際自転車競技連合（UCI）の認定を受けた国際サイクルロードレースとして、2023年10月に初回大会が開催され、2025年大会は第3回目となった。これまで福岡県・熊本県・大分県が舞台となってきたが、今大会では新たに長崎県（佐世保市）と宮崎県（延岡市）が加わり、開催地の広がりを見せている。

本大会は、単なるスポーツイベントにとどまらず、九州ならではの雄大な自然や豊かな文化を国内外に発信することで、地域の知名度向上と観光振興を図ることを目的としている。参考としているのは、世界的に有名な自転車ロードレース「ツール・ド・フランス」である。同大会では毎年1,500万人以上の観客が沿道に集まり、地域経済に1,500億円超規模の波及効果¹⁾をもたらしている。美しい風景と文化を世界に発信することで、観光誘致や地域ブランディングにも大きく貢献しており、国際的な注目を集めるイベントとして確固たる地位を築いている。「ツール・ド・九州」も同様に、九

表1 ツール・ド・九州2025ステージ概要

開催期間	2025年10月10日（金）～13日（月・祝）
主催	ツール・ド・九州2025実行委員会、 一般社団法人ツール・ド・九州
参加チーム	参加チーム：国内外18チーム 選手106人（20カ国）
開催地	長崎県・福岡県・熊本県・宮崎県・大分県
ステージ数	全4ステージ（クリテリウム1、ラインレース3）

資料）ツール・ド・九州2025実行委員会資料より九経調作成



▲ツール・ド・九州2025最終日、佐伯でのフィニッシュシーン
（出所：ツール・ド・九州2025実行委員会提供）

州の魅力を最大限に活かしたコース設計や演出を通じて、地域の賑わい創出と経済活性化を目指している。

そこで本稿では、九州経済調査協会が運営する観光人流分析プラットフォーム「おでかけウォッチャー」を活用し、この大会が地域の賑わい創出にどのような

表2 ツール・ド・九州2025ステージ一覧

日程	ステージ名	スタート地点	ゴール地点	距離	特徴・見どころ
10/10（金）	佐世保クリテリウム	長崎県佐世保市 （佐世保港・新みなと岸壁）		約45km	佐世保駅周辺約1.5kmの周回コース（30周）、高速展開、観客との距離が近い
10/11（土）	福岡ステージ	福岡県筑後市 （県宮筑後広域公園）	福岡県八女市 （旧国鉄矢部線・黒木駅跡）	約120km	矢部川沿いの美しい自然と黒木町の歴史を感じるコース
10/12（日）	熊本阿蘇ステージ	熊本県南小国町 （瀬の本レストハウス）	熊本県南阿蘇村 （南阿蘇村役場）	約115km	世界最大級のカルデラ地形を活かした起伏の激しい迫力満点のコース
10/13（月・祝）	宮崎・大分ステージ	宮崎県延岡市 （延岡市役所前）	大分県佐伯市 （さいき城山桜ホール前）	約119km	延岡から佐伯まで日豊海岸沿を駆け抜けるダイナミックなコース

資料）ツール・ド・九州2025実行委員会資料より九経調作成

1) THE LUXUO NEWSLETTER [The Business of the 2025 Tour de France: Economic Impact and Sponsorship Dynamics] <https://www.luxuo.com/culture/events/the-business-of-the-2025-tour-de-france.html>

影響をもたらしたのか、その実態について分析する。

2 おでかけウォッチャーの概要と分析スキーム

「おでかけウォッチャー」は、九州経済調査協会が運営する観光人流分析プラットフォームである。本ツールは、約3,000万MAU（月間アクティブユーザー数）の携帯電話位置情報データを活用し、独自の推定手法を用いて特定地域における人の流れを定量的に把握・分析することができる。観光地やイベント会場などの人流を日別・時間帯別・地域別に可視化できるほか、来訪者の推定居住地や属性（性別・年代）も把握可能であり、地域の賑わい創出や観光施策の計画立案、効果検証に広く活用されている。

なお、来訪者の定義は、スマートフォンユーザーの推定居住地から20km以上離れ、かつ位置情報ログ（5～15分間隔で取得）が勤務地ではない測定エリア内において、1日2回以上記録された人数としている。

本稿では、下記の手順でツール・ド・九州2025における人流について分析を実施した。

1) 分析対象エリア

分析対象エリアは、佐世保クリテリウムならびに各ステージのスタート地点とゴール地点周辺とした（表2）。

2) 来訪者の発地から分析対象エリアまでの距離設定

通常、「おでかけウォッチャー」は域外観光客の把握を目的とし、推定居住地から20km以上離れた移動を調査対象としている。しかし、本分析では対象エリア近隣からの来訪者数も把握するため、この20kmの枠を取り除き、推定居住地から500m以上の移動を調査対象とした。

なお、後述する周遊分析で用いる観光スポットについては、従来通り推定居住地から20km以上離れた広域からの来訪者を対象とした。

3) 来訪者数（全体）定義

来訪者数（全体）とは、各ステージ開催日における来訪者数（クリテリウム会場、スタート会場、フィニッシュ会場で計測した人数）を合計した延べ人数である。各ステージの4日間の単純な合計ではなく、各ステージの開催日ごとの来訪者数を足し上げたものである（表3）。

表3 来訪者数（全体）の対象となるステージと日程

ステージ名	2025年 10/10 (金)	2025年 10/11 (土)	2025年 10/12 (日)	2025年 10/13 (月・祝)
佐世保クリテリウム	○	—	—	—
福岡ステージ	—	○	—	—
熊本阿蘇ステージ	—	—	○	—
宮崎・大分ステージ	—	—	—	○

注1) ○印が分析対象日

注2) 来訪者数の集計日：5:00を日の区切りとし、5:00～翌日4:59の来訪者を同日の来訪者として集計

資料) ツール・ド・九州2025実行委員会資料より九経調作成

4) 前年比較の設定

来訪者数の分析にあたり、前年比較を行った。前年（2024年）の同月・同曜日を対象とし、各ステージの同一分析対象エリアで計測した来訪者数を比較するものである（表4）。

表4 ツール・ド・九州2025開催日に対応する前年比較日

ステージ名	ツール・ド・九州2025 開催日	⇔ 前年比較日
佐世保クリテリウム	2025年10月10日 (金)	2024年10月11日 (金)
福岡ステージ	2025年10月11日 (土)	2024年10月12日 (土)
熊本阿蘇ステージ (※)	2025年10月12日 (日)	2024年10月13日 (日)
宮崎・大分ステージ	2025年10月13日 (月・祝)	2024年10月14日 (月・祝)

注1) 前年に同一コースで開催されたのは熊本阿蘇ステージ（※）のみで、その他のステージは初開催である。

注2) 2024年の全体来訪者数は、2025年各ステージの分析対象エリアにおける前年比較日に計測した来訪者数を合算したものである。

資料) ツール・ド・九州2025実行委員会資料より九経調作成

5) 分析項目

分析項目は以下のとおりである。

- ①来訪者数
- ②来訪者属性（20歳代～60歳代の5区分×性別）
- ③来訪者発地

- ④宿泊誘発力（宿泊・日帰り率、当日の宿泊地）
- ⑤周遊行動（観測スポット間周遊）

3 分析結果

1) 来訪者数

ツール・ド・九州2025の全会場の来訪者数は、60,140人に達し、前年（2024年）の23,878人と比較して約2.5倍という大幅な増加を記録した（図1）。ちなみに、前年同コース開催の熊本ステージを除くと2024年（非開催時）の12,827人に対して2025年（開催時）は54,268人となる。前年比で約4.2倍となり開催効果の大きさが分かる。

会場毎の来訪者数をみると、特に前年未開催であった初回開催会場（佐世保・筑後・八女・延岡・佐伯）の全てにおいて前年比280%以上の顕著な伸びが確認された（図2）。

初日の佐世保クリテリウムは、佐世保駅周辺の好立

地と観戦しやすい周回コースの特性により、来訪者数16,273人を記録し、前年比303%で今大会最大の集客となった。

2日目の福岡ステージでは、スタート地点の筑後会場に6,904人（前年比284%）、フィニッシュ地点の八女会場には9,840人が来訪し、前年比1,484%という驚異的な伸びを示した。

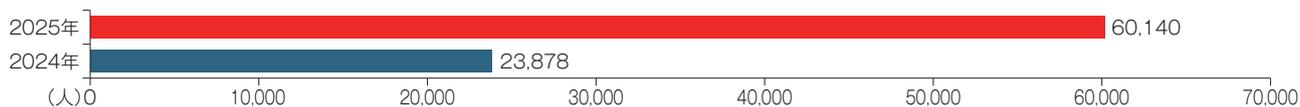
3日目の熊本ステージは、前年と同月同曜日・同コースでの開催という条件下で、来訪者数（スタート・フィニッシュ地点合計）は前年比96%と微減したが、安定的な集客を維持した。

本大会初の2県同時開催となった最終日の宮崎・大分ステージでは、スタート地点の延岡会場で5,677人（前年比984%）、フィニッシュ地点の佐伯会場で8,655人（前年比604%）と、いずれも前年を大きく上回る結果となった。

通常時と比較して顕著な集客増が確認された背景には、複数の要因が考えられる。

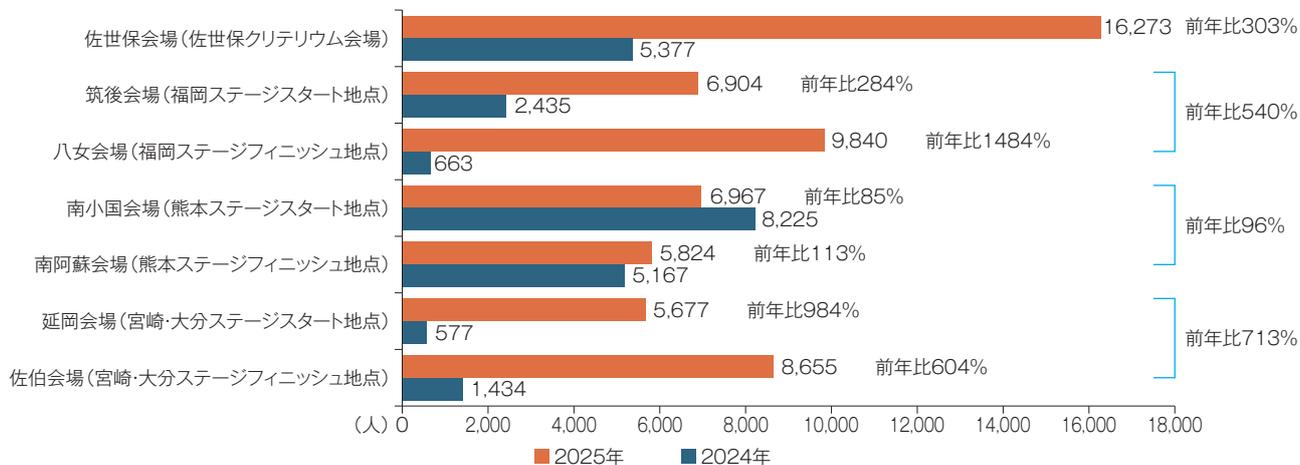
まず、初回開催会場における開催効果が挙げられ

図1 来訪者数（全体）



注) ツール・ド・九州2025実行委員会発表の観客数（速報値）は106,500人であるのに対し、本稿では60,140人となっている。これは集計範囲や算定手法の違いによるものである。
資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

図2 来訪者数（会場別）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

る。2025年は、佐世保・延岡に加え、前年開催県であっても熊本を除く各会場が初開催であり、その効果が顕著であった。特に八女や延岡では、他会場を大きく上回る増加が確認された。

イベントコンテンツの充実も要因の一つである。観戦以外の楽しみ方を提供するため、地域グルメや地元産品の販売、ステージイベントなどを強化した。佐世保・熊本・宮崎会場では漫画『弱虫ペダル』原作者によるサイン会やトークショーを実施し、来場者の動機を多様化させた。

さらに、プロモーション施策の強化が挙げられる。2025年春以降は、YouTubeやSNSを活用した情報発信など、デジタル施策を強化し、大会認知度の向上を図った。加えて、開催地域では観戦や来場への関心を高めるため、大会前に多様なリアルイベントを実施した。具体的には、延岡での初開催記念ファンライドをはじめ、阿蘇での応援ライド、佐伯での100日前イベント、佐世保でのクリテリウムコースを使った「ごみ拾いウォーキング」など、地域と連携した施策が展開された。こうしたデジタル施策とリアルイベントの組み合わせにより、地域内外で認知度が向上し、集客増につながったとみられる。

2) 来訪者属性（性別・年齢）

属性データによれば、来訪者全体の男女比は男性58.4%、女性41.6%であり、男性がやや多い傾向

が確認された（図3）。この傾向は、競技の特性上、自転車の性能やレース戦術に興味を持つ層に支持されやすいことが一因とみられる。一方で、ルールは知らなくても圧倒的なスピード感や臨場感を楽しめるため、専門知識がなくても魅力を感じる人が多く、女性も4割を占めている。さらに、観戦以外のコンテンツの充実が男女問わず幅広い層の来訪を後押ししたと考えられる。

年代構成をみると、全体的には来訪者は20代から60代まで幅広く分布しており、イベントが多世代に受け入れられていることが示されている（図4）。特に50代・60代の参加率が高いのは、競技観戦を地域の魅力と結びつけた「体験型観光」として楽しむ傾向が背景にあるとみられる。一方、若年層も一定割合を占めており、SNSや動画配信による情報発信が来訪動機に寄与した可能性がある。

男女別に年代構成をみると、男性は30代～50代が中心であり、競技理解や趣味性の高さが来訪動機となっていることがうかがえる。一方、女性は60代の比率が高く、地域イベントやグルメなど複合的な楽しみ方を重視する傾向があると考えられる。こうした属性差は、イベントが競技観戦にとどまらず地域体験型イベントとして機能していることを示しており、スポーツツーリズムの広がりを示す結果といえる。

3) 発地分析

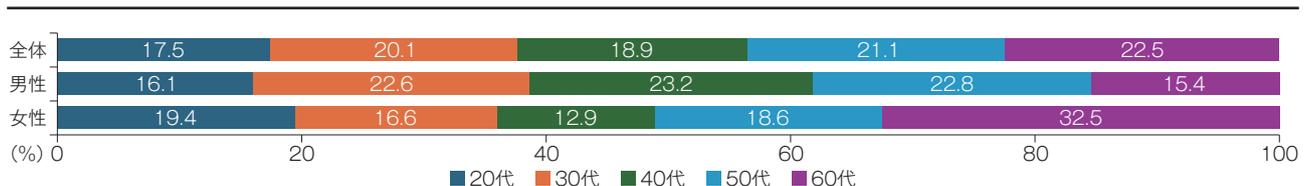
九州・沖縄・山口地域（以降、九州地域という）

図3 来訪者の性別構成（全体）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

図4 来訪者の年代構成



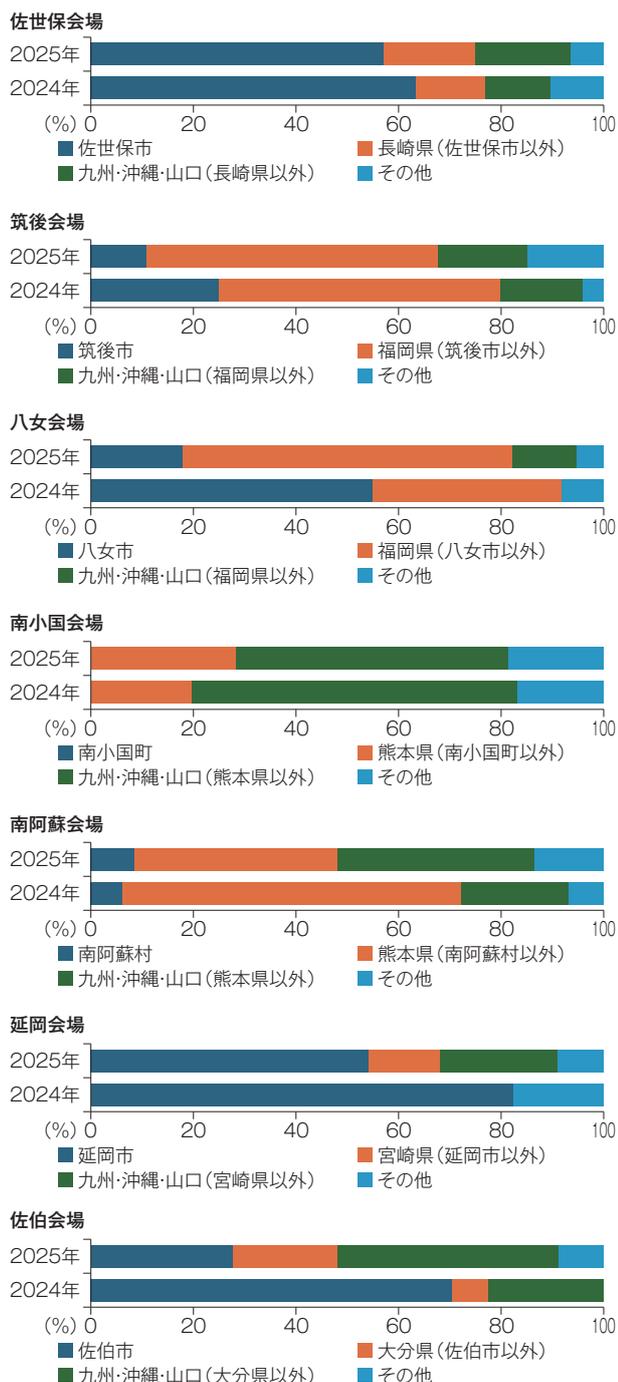
資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

図5 来訪者の発地構成（全体）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

図6 来訪者の発地構成（会場別）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

とその他の地域からの来訪者割合をみると、九州地域からの来訪者は開催年・前年ともに約90%を占め、イベントの主な集客基盤は域内にあることが分かる（図5）。特に開催県内からの来訪比率は、前年の57.1%から62.8%へと5.7ポイント上昇しており、大会開催により地元住民の観戦や来場への関心が高まり、地域内での人の動きが活発化した可能性がある。

一方、九州地域外からの来訪は約10%と限定的であり、全国的な認知度の向上や三大都市圏など大規模市場からの誘客には、なお伸びしろがある。

来訪者の発地構成を会場ごとにみると、立地や地域資源の特性に応じて、市街地型（佐世保・延岡・佐伯）、都市近郊型（筑後・八女）、地方観光型（南小国・南阿蘇）の3類型に分類できる（図6）。各類型の特徴は次のとおりである。

市街地型（佐世保・延岡・佐伯）は、地元比率が相対的に高く（佐世保57%・延岡54%・佐伯28%）、集客規模が大きく地域経済への効果が期待できることが特徴である。また、前年に比べて自市以外の九州地域からの来訪が増加（佐世保+6%、延岡+25%、佐伯+43%）しており、広域からの集客の増加も確認できた。

都市近郊型（筑後・八女）は、地元比率が低く（筑後11%・八女18%）、福岡県内からの来訪が大半を占める傾向が見られる。福岡都市圏に近い立地条件を背景に、県内客や日帰り需要の取り込みに成功しているとみられる。

地方観光型（南小国・南阿蘇）は、県外比率が高い（南小国72%・南阿蘇51%）点の特徴で、広域誘客に強みを持つ。観戦者は競技の一部を観覧した後、周辺の自然景観や観光地を楽しむケースが多く、

観光との組み合わせによる来訪が促されているとみられる。

全体では、来訪者の約86%が開催県となる九州5県からであり、その中でも福岡県が約36%と突出している。市街地型・都市近郊型・地方観光型の3類型それぞれに、地域特性に応じた集客傾向が見られ、大会開催が地域の人流創出に寄与したことが示されている。今後とも、域内集客の強みを維持しつつ、広域誘客の拡大に向けた取り組みを進めることが望まれる。

4) 宿泊誘発力

①日帰り旅行・宿泊旅行者数・比率

2025年大会では、宿泊旅行者数が17,941人に達し、前年の5,395人と比較して約3.3倍という大幅な増加を確認した(図7)。日帰り旅行者も前年の18,481人から42,191人へと約2.3倍に増加しているが、宿泊旅行者の伸び率はそれを上回っており、宿泊を伴う来訪が強化されたことが分かる。

比率で見ると、全体の宿泊率は29.8%となり、前年より7.2%ポイント上昇した。この変化は、大会開催による滞在型行動の促進を示しており、地域内での消費機会の拡大に大きく寄与したと考えられる。

会場ごとの来訪者の旅行形態(日帰り・宿泊)を分析した結果、全会場で宿泊者数が前年を大きく上回り、大会が来訪パターンに与える影響が顕著に表れた(図8)。

発地分析同様に立地や地域資源の特性に応じて市街地型、都市近郊型、地方観光型の3類型別にみる

と、市街地型(佐世保・延岡・佐伯)のうち佐世保・延岡会場では交通利便性と日帰り需要の高さから宿泊率は低下したが、宿泊者数は、佐世保2,941人(前年比222%)、延岡1,866人(前年比952%)と総来場者数の増加により大幅に増加している。佐伯は、宿泊率40%(+18%ポイント)、宿泊者数3,467人(前年比1,077%)と宿泊率・宿泊者数ともに上昇した。

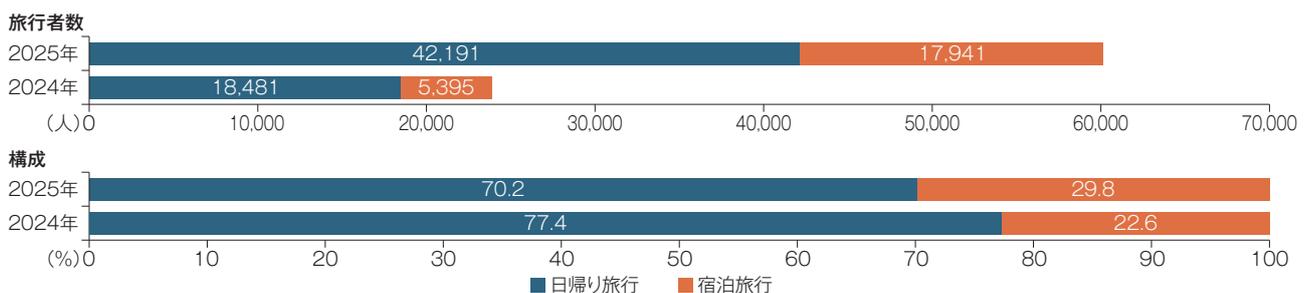
都市近郊型(筑後・八女)では、福岡都市圏に近い立地特性から日帰り来訪が増える一方、宿泊も増加。筑後は宿泊者数1,843人(前年比481%)、宿泊率27%(+11%ポイント)。八女は宿泊者数2,581人(前年比4,780%)と突出した伸びを示し、宿泊率も約26%(+18%ポイント)に達した。

地方観光型(南小国・南阿蘇)では来訪者数は前年並みだが、宿泊者数・宿泊率ともに大幅増。南小国は宿泊者数3,172人(前年比148%)、宿泊率約46%(+19%ポイント)。南阿蘇は宿泊者数2,071人(前年比214%)、宿泊率約36%(+17%ポイント)。これらの地域では、大会を契機に宿泊需要の獲得と滞在型観光が促進され、地域内消費や観光関連産業への波及が強まったことがうかがえる。

②来訪者の宿泊先

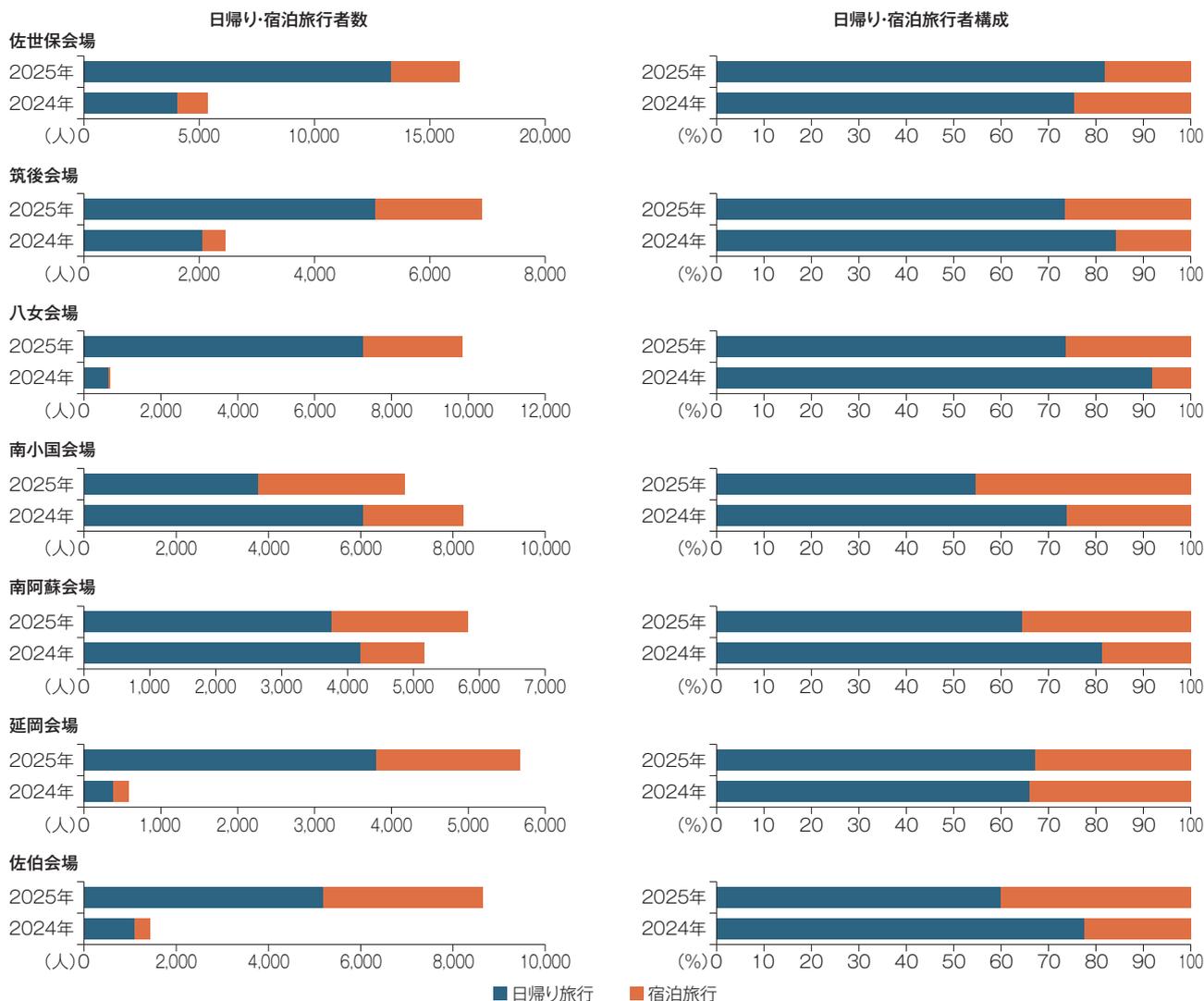
来訪者の大会当日の宿泊地を「開催自県」、「開催自県以外の九州地域」、「その他」に分けて分析すると、開催自県での宿泊割合は2024年の53.2%から2025年は31.6%へと21.6%ポイント低下した(図

図7 来訪者の日帰り旅行・宿泊旅行者数と構成(全体)



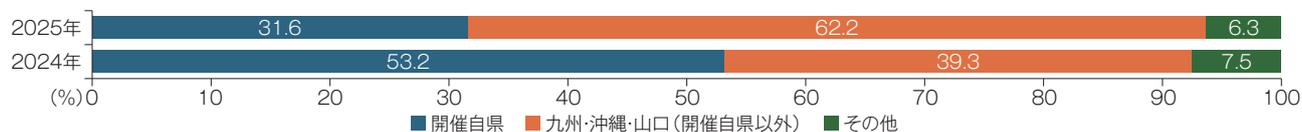
資料) 九経調「おでかけウォッチャー(国内版)」のデータをもとに作成

図8 来訪者の日帰り旅行・宿泊旅行者数と構成（会場別）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

図9 来訪者の宿泊地（全体/開催自県基準）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

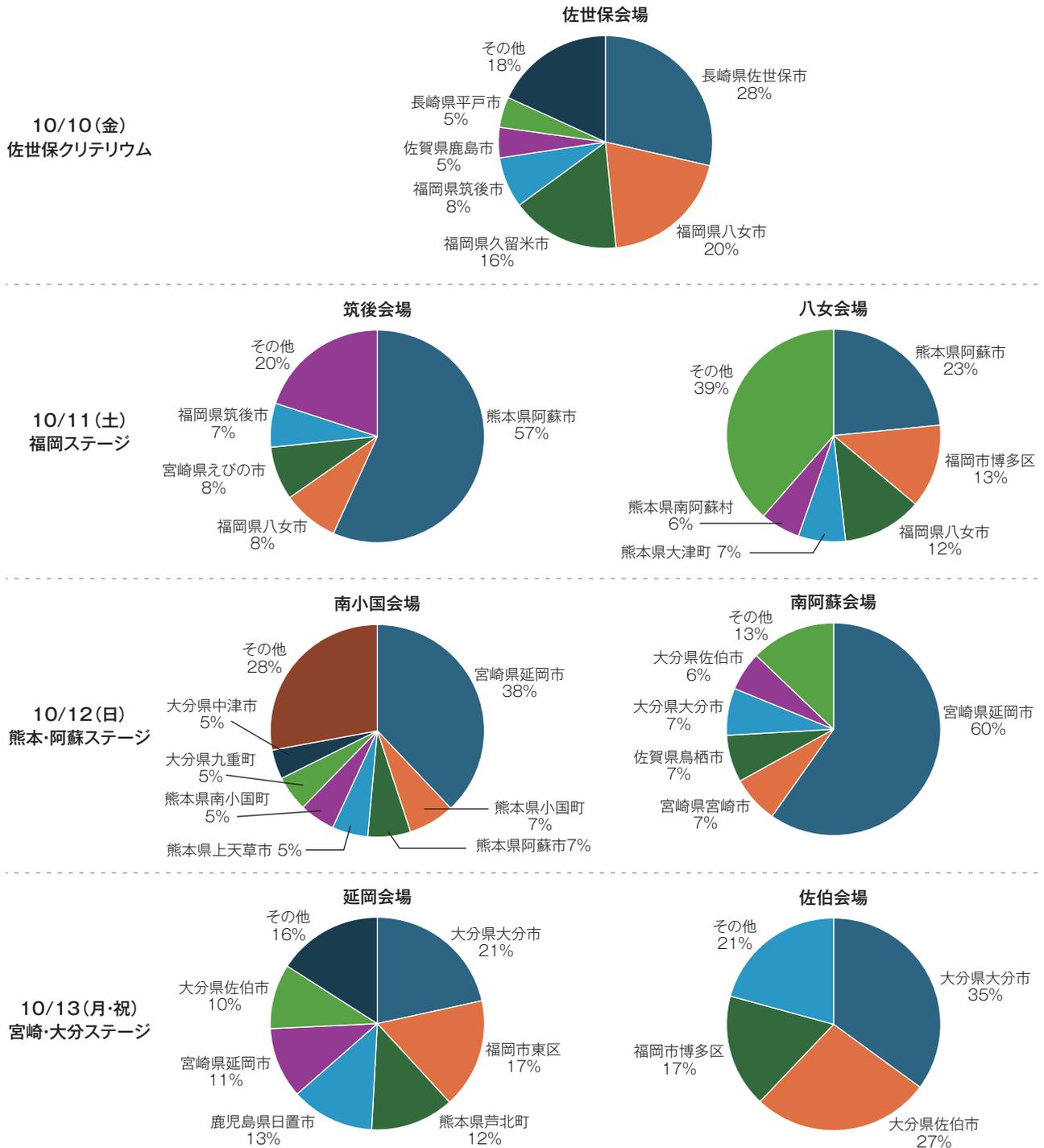
9)。この変化は、単一県内での滞在にとどまらず、複数県を巡る広域的な滞在行動が拡大していることを示している。

開催市町村での宿泊割合が低下した背景には、一部の観戦者が次の開催地を見据えた宿泊行動をとることにある。会場別の当日の宿泊地をみると、佐世保会

場の来訪者の宿泊地の2位が八女市、福岡会場（筑後・八女）来訪者の宿泊地の1位は阿蘇市、熊本会場（南小国・南阿蘇）来訪者の1位は延岡市であり、翌日以降の開催地へ移動して宿泊する傾向が確認された（図10）。

さらに、来訪者の宿泊地を「開催県（長崎・福

図10 来訪者の宿泊地（会場別）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

図11 来訪者の宿泊地（全体/全開催県基準）



資料) 九経調「おでかけウォッチャー（国内版）」のデータをもとに作成

岡・熊本・宮崎・大分)「九州地域の非開催県(山口・佐賀・鹿児島・沖縄)」「その他」に分類すると、約9割がいずれかの開催県に宿泊していることが分かる(図11)。非開催県やその他の地域への宿泊は限定的であることから、大会が開催全県での宿泊を誘発しており、観戦行動が開催全県を範囲とした広域的な移動・宿泊行動へと結びついていることが明らかとなった。

5) 周遊行動(観測スポット間周遊)

各会場を起点とした周遊状況を見ると、全体の周遊件数は38,790回に達し、前年の10,688回と比較して約3.6倍という大幅な増加を記録した(図12)。この増加は、大会が単なる観戦行動にとどまらず、複数の観測スポットを巡る行動を強く促していることを示している。こうした周遊行動の拡大は、宿泊同様、長時間滞在を促し観光消費の拡大や地域経済への波及効果を高める要因になっている。

大会開催日の各会場来訪前後の周遊状況を分析した結果、大会特性を示す特徴が明らかになった(表6)。

まず、市街地開催型の佐世保会場では、商業施設を中心とした周遊が顕著で、周遊件数は13,709回と非開催である前年の約5倍に増加した。特に商業施設である「させば五番街」(7,078回)および商業エリア「さるくシティ403アーケード」(2,560回)が全体の約7割を占め、地域の消費拡大に寄与したとみられる。

次に、スタート・フィニッシュ会場間の周遊も活発であった。福岡ステージでは筑後・八女間で1,750回、熊本ステージでは南小国・南阿蘇間で857回、県境を跨ぐにもかかわらず、大分・宮崎ステージの延岡・

表5 ツール・ド・九州関連スポット(*)

No	観測スポット名	所在地
1	佐世保クリテリウム会場	佐世保港・佐世保駅周辺
2	福岡ステージスタート地点	筑後広域公園内
3	福岡ステージフィニッシュ地点	国鉄矢部線黒木跡
4	福岡ステージ スプリント計測地点	津江神社付近
5	福岡ステージ KOM計測地点	住所:黒木町田代
6	熊本ステージスタート地点	瀬の本レストハウス
7	熊本ステージフィニッシュ地点	南阿蘇役場
8	熊本ステージ スプリント計測地点1	JA一の宮中央支所付近
9	熊本ステージ スプリント計測地点2	住所:高森町色見小倉原
10	熊本ステージ KOM計測地点	住所:一の宮町手野
11	宮崎・大分ステージスタート地点	延岡市役所前
12	宮崎・大分ステージフィニッシュ地点	佐伯城山桜ホール前
13	宮崎パレード走行地点	延岡市山下新天街
14	宮崎・大分ステージ スプリント計測地点1	延岡市北浦公民館付近
15	宮崎・大分ステージ スプリント計測地点2	かまエインターパーク付近
16	宮崎・大分ステージ スプリント計測地点3・佐伯市パブリックビューイング会場	道の駅かまえ
17	宮崎・大分ステージ KOM1計測地点	住所:北浦町町三河内
18	宮崎・大分ステージ KOM2計測地点	空の公園

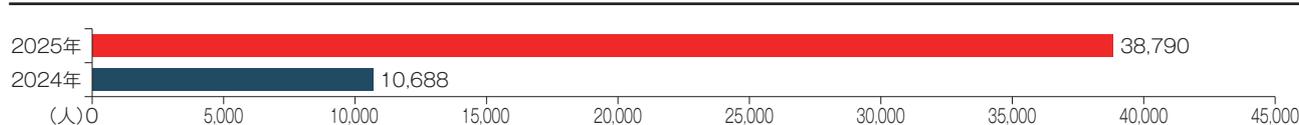
注) スプリント計測地点=ポイント賞の計測地点。
KOM計測地点= King of the Mountain (山岳賞) の計測地点。
資料) 九経調「おでかけウォッチャー(国内版)」のデータをもとに作成

佐伯間で1,301回が記録された。さらに、計測地点との周遊も顕著で、八女会場と福岡ステージ:スプリント計測地点との移動は4,132回に達し、八女会場来訪者の42%を占めた。熊本ステージでは、辺鄙な山道に位置する山岳賞(KOM)計測地点付近への移動が339回確認され、コアなファン層による周遊行動がうかがえる。

観戦と観光を組み合わせた周遊も各地で確認された。佐世保会場と「ハウステンボス」間で457回、南小国会場と道の駅「あそぼうの郷くぎの」で1,046回、佐伯会場と「九重“夢”大吊橋」間で191回の移動が記録されている。さらに、佐世保会場の来訪者が翌日の福岡ステージのゴール地点付近の観光地である「八女福島町の町並み」を訪れるなど、県境を越えた広域的な観光周遊も確認された。

また、大会当日、佐世保、筑後、八女の各会場では、「スタンプラリー」が実施され、来訪者が市街地

図12 会場訪問前後における観測スポット訪問回数(全体)(単位:人回)



注1) 周遊行動とは、同一日に複数の観測スポット間を移動する行動をいう。
※3箇所以上来訪した場合は、直前・直後に訪問した観測スポットのみ集計対象とし、A→B→Cの場合、A→B、B→Cでそれぞれ1カウントとする
注2) 観測スポットとは、予め指定した観光スポット及びツール・ド・九州関連スポット(*)とする(表5)。
資料) 九経調「おでかけウォッチャー(国内版)」のデータをもとに作成

表6 各会場来訪前後における観測スポット訪問回数
会場別上位5位 (単位:人回)

【佐世保会場】				
順位	2025年		2024年	
	周遊先	周遊回数	周遊先	周遊回数
1	させぼ五番街	7,078	さるくシティー403アーケード	1,121
2	さるくシティー403アーケード	2,560	佐世保駅	538
3	佐世保駅	2,352	させぼ五番街	496
4	八女福島町の並み	537	佐世保四季彩館	103
5	ハウステンボス	457	天神	103
	合計	13,709	合計	2,651

【筑後会場】				
順位	2025年		2024年	
	周遊先	周遊回数	周遊先	周遊回数
1	国鉄黒木跡 (*福岡フィニッシュ地点)	1,750	ゆめタウン八女	160
2	八女福島町の並み	287	別府湾SA(上り)	122
3	筑後船小屋駅	200	JAふくおか八女よらん野	113
4	*福岡スプリント計測地点	126	-	-
5	九州芸文館	126	-	-
	合計	3,032	合計	395

【八女会場】				
順位	2025年		2024年	
	周遊先	周遊回数	周遊先	周遊回数
1	*福岡スプリント計測地点	4,132	八女福島町の並み	244
2	筑後広域公園 (*福岡スタート地点)	1,750	*福岡スプリント計測地点	54
3	八女福島町の並み	378	-	-
4	阿蘇内牧温泉	327	-	-
5	筑後船小屋駅	200	-	-
	合計	7,298	合計	298

【南小国会場】				
順位	2025年		2024年	
	周遊先	周遊回数	周遊先	周遊回数
1	南阿蘇役場 (*熊本フィニッシュ地点)	857	道の駅 あそ望の郷くぎの	499
2	くじゅう花公園	565	南阿蘇役場 (*熊本フィニッシュ地点)	432
3	道の駅小国ゆうステーション	458	大観峰 展望所	386
4	長湯温泉	268	黒川温泉	369
5	阿蘇内牧温泉	255	阿蘇内牧温泉	365
	合計	4,901	合計	5,367

【南阿蘇会場】				
順位	2025年		2024年	
	周遊先	周遊回数	周遊先	周遊回数
1	道の駅 あそ望の郷くぎの	1,046	道の駅 あそ望の郷くぎの	650
2	瀬の本レストハウス (*熊本スタート地点)	857	瀬の本レストハウス (*熊本スタート地点)	432
3	*熊本KOM計測地点	339	道の駅阿蘇	246
4	道の駅 大津	331	瀬の本高原ホテル	162
5	延岡駅	211	くじゅう・わいた展望公園	123
	合計	4,156	合計	1,816

【延岡会場】				
順位	2025年		2024年	
	周遊先	周遊回数	周遊先	周遊回数
1	佐伯城山桜ホール前 (*大分フィニッシュ地点)	1,301	-	0
2	延岡市山下新天街 (*宮崎/レド走行地点)	363	-	0
3	大分空港	75	-	0
	合計	1,739	合計	0

【佐伯会場】				
順位	2025年		2024年	
	周遊先	周遊回数	周遊先	周遊回数
1	延岡市役所前 (*宮崎スタート地点)	1,301	道の駅やよい	161
2	大分駅	564	-	-
3	佐伯駅	485	-	-
4	延岡市山下新天街 (*宮崎/レド走行地点)	264	-	-
5	九重「夢」大吊橋	191	-	-
	合計	3,955	合計	161

注) 2025年周遊回数上位5位の観測スポットを表示
資料) 九経調「おでかけウォッチャー(国内版)」のデータをもとに作成

や周辺の観光地、商業施設を巡る仕掛けも行われている。

総じて、大会開催により、会場を起点とした多様な周遊行動が創出されたことが明らかとなった。商業施設を中心とする市街地回遊や、歴史・自然・温泉などの観光資源を活かした地域回遊、さらに県境を越えた広域的な周遊が確認され、滞在時間の延長や地域消費の拡大につながったとみられる。今後は、こうした大会特性を踏まえ、観戦と観光を組み合わせた施策を強化し、広域的な周遊をさらに促進することが期待される。

4 まとめ

ツール・ド・九州2025は、「来訪地分析」の結果、総来訪者数60,140人(前年比252%)という大規模な人流を創出し、九州全体に強いインパクトを与えた。大会は観戦にとどまらず、ステージイベントの開催や飲食の提供、観光資源の活用など地域の特色を活かした取り組みを複合的に展開した。その結果単なる自転車レースにとどまらず、地域体験型イベントとして機能し、地域の賑わい創出と経済活性化に寄与していることが明らかになった。

「属性分析」では、大会が性別や年代を問わず幅広い層に受け入れられていることが確認された。一方で、自転車レース観戦ファンのコア層の育成とすそ野拡大は次フェーズの重点領域である。阿蘇や延岡、佐伯での大会前の参加型のサイクリングイベントは本大会の認知度向上やファン層拡大に大きく寄与したものの、ツール・ド・九州は年1回の開催にとどまるため、継続的なファンづくりや地域との結びつきを深めるには限界がある。今後は、ツール・ド・九州を軸に、年間を通じて、九州全域における自転車競技の観戦機会と参加イベントを連携させる仕組みを構築し、「サイクリングアイランド」としてのブランドを育成・浸透させることが求められる。

「発地分析」では、来訪者の約9割が九州域内であり、全国の大都市圏や海外からの誘客には伸びしろがあることが明らかになった。これまでは大会の認知向上と質的向上に注力してきたが、今後は九州域外、なかでも全国の大都市圏や海外を視野に入れた誘客戦略へと移行する段階にある。九州全体を一つのプロモーション領域とし開催地自治体が一体となって自転車競技と、観光と融合したプロモーションを展開することで、国内外での認知を拡大し、「九州」のブランド価値を世界に発信するチャンスが広がる。

「宿泊誘発力分析」の結果、宿泊旅行者数は前年の約3.3倍に増加し、大会開催が宿泊需要を強く喚起したことが確認された。開催県での宿泊割合は減少した一方で、県境を越えた広域的な滞在行動が活発化し、九州全体で宿泊消費が拡大した。今後は、この広域的な宿泊行動をさらに促進する施策の検討が求められる。

「周遊分析」では、各ステージにおいて会場を起点とした多様な周遊行動が創出されたことが明らかとなった。しかし、開催地全域での連携した取り組みにはまだ余地がある。大会特性上、複数ステージをハシゴ観戦する層も一定数存在しており、単独ステージにとどまらず、九州全体での広域的な周遊を促す仕掛けは、宿泊と同様に地域経済への波及効果をさらに高めるうえで有効である。

2026年大会では佐賀県の参画が決定し、目標とする九州7県すべてでの開催に向けた体制が整いつつある。開催を重ねる中で、ツール・ド・九州は、地域の魅力を発信し、体験できるイベントとして着実に進化を続けている。今後は、ツール・ド・九州をハブとして、九州の強みである観光との連携をさらに強化し、各県の特色を活かしながら広域的な取り組みを深化させることで、大会価値を高め、九州を世界に誇るサイクリングの聖地としての地位を確立していくことが期待される。

石原 彰人（調査研究部 調査役）